

## 明治用水の開削者

# 伊 豫 田 与 八 郎

伊豫田与八郎は、1822(文政5)年、碧海郡阿弥陀堂村(現豊田市<sup>あみだどう</sup> 畷部西町)に生まれ、幼くして同じ村の伊豫田家の養子となった。伊豫田家は豪農であり、彼が家督を相続したときは岡崎藩が支配していた領地で東海道以北、矢作川以西の33か村1万1千石を采配する大庄屋であった。

もともと、阿弥陀堂村をはじめ矢作川に隣接する村々は低地であって、一度雨が降ると水害となり村人達は苦しんでいた。そのような状況の下、村人の一人であった伊豫田善兵衛<sup>ぜんべえ</sup>からこの低地の水を安城、刈谷、高浜を経て衣浦湾に排水する計画を相談されたことで、与八郎の運命は大きく舵を切ることとなる。

与八郎は「自分の命にかけても、きっと成し遂げる」との熱意をもってこの計画の実現に取り組み、ついには岡崎藩を動かしたが、他藩の反対に遭い調整できなかった。

世は移り、明治時代になっても与八郎の用悪水路開削への熱意は変わらなかった。度重なる行政機関の変動にもめげず、再三水路開削計画を出願した。

1873(明治6)年、愛知県令に提出した「悪水抜願書」には七か村戸長の総代として与八郎の記名があるが、この頃から計画は与八郎自身のものとなっていった。

一方、岡本兵松が都築弥厚の計画を実現しようと出願していたのも同じ頃で、愛知県は両者の計画の合併を強く要求し、二人の承諾を得て測量に入った。この測量の結果、与八郎の計画は地形の高低から考えて困難であることがわかり、兵松の用水計画案に協力していくこととなった。

与八郎と兵松は農民の説得と資金調達などに碎身し、驚くほど短期間で用水路を完成させた。

そうして用水路ができあがったとき、与八郎には多額の借金が出ていた。長年の奔走に出費がかさんだのに対して事業完成によって得たものは少なく、加えて、1881(明治14)年、政府のデフレ政策により破産した。

しかし、与八郎の功績は忘れ去られた訳ではなかった。1883(明治16)年には藍綬褒章<sup>らんじゅうほうしょう</sup>を受け、1889(明治22)年には明治川神社<sup>ししやう</sup>の祠掌(神職)に選ばれた。

晩年は用水の流れを見、多くの農民からの尊敬を集めて余生を送り、74歳で波乱に富んだ人生の幕を閉じた。

### 伊豫田与八郎像

豊田市立畷部小学校内(豊田市畷部西町)

